

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	菊地 有希子
論文題目	弥生時代中期の稲作と集落—関東地方を中心として—
<p>審査要旨</p> <p>本論は、弥生時代中期の稲作と集落について論じている。稲作については日本全体を見通して述べ、稲作と集落との関係では関東地方に的をしばって事例研究をおこなっている。</p> <p>第1章の水田稲作の定着と農耕社会への変化からはじまり、第6章の結語にまとめている。以下に章をおって検討する。</p> <p>まず第1章は、日本列島での水田稲作定着の動機について述べ、畑作と稲作との関係を論じる。遺跡例の分析から関東地方では稲作の定着が、弥生中期まで遅れるとみなしている。その上で今まで稲の生産性についての詳しい検討がなされてこなかった研究史上の問題を指摘する。</p> <p>第2章は米の生産性について述べ、8年間にわたる早稲田大学での赤米栽培実験で得た成果を示す。栽培実験の開始に先立って、まず米の生産性に関する弥生時代の稲作技術や栽培条件を論じる。このため稲の栽培品種、施肥の有無、栽植方法、栽植密度などを、遺跡例や遺構、出土遺物などから検討している。ついで収穫量について研究史を整理し、従来の推定方法では前提や各種の条件設定が恣意的だと問題点を的確に指摘する。そのために一定の条件設定のもとで長期的な展望にたって、具体的に米の栽培実験を試みる必要があると強く主張している。</p> <p>本論文の最も重要な実験考古学による赤米栽培の経年データが、2000年から昨年の2007年まで8年間にわたって詳細に記録されている。また赤米の民俗事例として、鹿児島県種子島の宝満神社例、長崎県対馬の多久頭魂神社例、岡山県総社市の国司神社例について述べ、現地に赴いての収量計測調査の結果も示している。この栽培実験データをもとにして直播きよりも移植（田植え）が、移植の場合は移植密度が高いほど収穫量が多くなると新たな指摘をしている。推定値そのものの適否もさることながら、一穂あたり粒数や一株の分けつ数など収量推定に不可欠な基礎情報を実験によって提示した点で、高く評価できる内容である。今では失われている弥生稲作技術の解釈を補うデータを蓄積した独創的で粘り強い研究である。</p> <p>第3章は、米の生産性や生産量から一步進めて、弥生時代の食性に占めた米の割合を検討する。関東地方の例をとりあげ、弥生中期で居住域（集落址）と生産域（水田址）の両者が発掘された遺跡を検討して、米食の割合を分析している。</p> <p>それによると、弥生中期後葉の埼玉県熊谷市北島遺跡で、水田址と集落址とが検出されている。水田面積から推定できる米の総生産量は4000～4800kg、一時期に住んだ集落人口75人とすれば、米食が占める割合はおよそ26～31%程度になると試算している。</p> <p>弥生中期後葉の千葉県市原市菊間手永遺跡では、146000 m²の水田址から総生産量19800～21300kgの収穫が見込める。一時期の住居址は62～85軒前後で、集落人口は300～420人前後とすれば、米食の割合は26～31%となる。</p> <p>弥生後期の静岡県登呂遺跡では、水田址が70585 m²で、1時期の住居址は12軒、集落人口は60人となる。水稻の総生産量は、9537～11174kgで、76～89%の高い米食割合になるという。移植栽培など農業技術の発展があった可能性があるともみなしている。</p> <p>食性に占める米食を推定する場合、歴史時代のありようと近現代の70%前後で主食とみる感覚とを、弥生時代にまでさかのぼらせるのは適切ではないとする。雑穀の存在も視野に入れると、米食の比率</p>	

氏名 菊地有希子

は、25～31%前後が妥当ではないかとしている。

第4章は関東地方における弥生中期の集落と稲作を検討する。研究史をたどると、水田稲作の生産性を低く評価する傾向があると指摘する。地形や土壌をとりあげ、集落の立地と隣接する水田適地との関係を探り、荒川流域、養老・小糸川流域、相模川流域を対象地域としている。

弥生中期中葉に水田稲作が受容された荒川流域と養老・小糸川流域は、土壌生産力の高い地域に集落が形成される。ところが中期後葉には土壌生産力の低い地域にも進出する。また養老・小糸川流域と相模川流域では、中期中葉には小谷付近で生活し、中期後葉以降には広い氾濫原のある後背湿地に面した場所を選ぶようになるという。ただ土地生産力の低い地域に形成された集落も存在し、集落立地は単に水田稲作だけでなく、自然環境や社会環境など複数の要因によっていると説明する。

第5章は、荒川扇状地における中期集落の構造と展開で、おもに北島遺跡を中心に論じている。荒川扇状地の扇端部は豊富な伏流水が湧き出し、土壌生産力の高い水田適地であり、微高地上で場所を変えながら集落を作り続ける。複数の集団が集まり、共同して灌漑施設を築いて管理し、水田稲作にともなう労働の集約化や高い生産性を背景にした積極的な営農が認められるとする。

第6章は結語としてまとめ、総括をおこなっている。

まず縄文時代に想定される焼畑や天水田の生産性を検討し、ついでアジアの民族例を探っている。縄文と弥生の稲作の違いのひとつは、まず生産性にあらわれるとみなす。水田稲作を受け入れた弥生時代の人々にとって、高い生産性こそが水田稲作の受容と定着をもたらした要因であると指摘している。そして関東地方における水田稲作の定着過程を3段階に区分している。

(1) 弥生前期から中期前葉 稲作情報の伝播期・縄文的生業の継続

(2) 弥生中期中葉 水田稲作の受容開始・一部定着期

(3) 弥生中期後葉 水田稲作の定着・展開期

以上のように本論文は、水田稲作の生産性と米収量の推定研究を中心軸としている。実験考古学の成果を関東地方の事例研究に適用して、一定の成果をあげること成功している。

とくに研究の基盤となった実験考古学および民俗・民族考古学の方法による米収穫量推定値は、奈良時代の文献史料にもとづいた従来の推定値よりもはるかに説得性がある。この点ひとつでも課程博士論文としては出色の出来栄だと評価できる。さらに関東地方の弥生中期集落の水田適地への立地、灌漑施設を中心とした集落展開と労働力の集約化、食性に占める米食割合の増大などを追究している。最後に水田稲作の受容と定着に対する積極性の背景には、水田稲作の生産性の高さに大きな魅力と動機が存在したと結論付けている。

このように創意と独創性に富み、水田稲作の実験に始まり米の生産性や収量を切り口として、弥生時代社会の復元をめざして貴重な成果を挙げている。ただ文章のところどころに生硬な表現やデータを過信したような点が見受けられる。こうした点の是正とより広い視野にたてば、近畿地方から九州、まで事例研究を積み重ね、いっそう精緻な分析と比較研究の深化が期待できる内容である。以上のように本論文は、課程による博士（文学）の学位論文として十分な成果をあげていると判断する。

公開審査会開催日	2008 年 12 月 9 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院 教授		岡内三眞
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	文学博士（早稲田大学）	菊池徹夫
審査委員	早稲田大学文学学術院 客員教授		後藤 直
審査委員			